

財団法人 合唱音楽振興会設立趣旨

わが国が洋楽に対して本格的に取り組みはじめたのは、文部省に音楽取調掛が設置された1879年を起点とするもので、爾来嘗々としてその受容およびその教育の中心としての役割を果しつつここに百年の経過を見るに至っています。異種文化の交流にあたり洋楽界がかくも短期間に今日の盛況を見るに至ったのは、この設置を始めとする官民挙げての叡智と努力の賜物であり、今日に於いては作曲界をはじめとして、演奏界・教育界にも国外に範となるものも少なくありません。

翻って世界の音楽を概観すれば遠く先史時代より人類の在るところ必ず「歌」がありその集合体〈合唱〉は祭礼をはじめとして生活と分かちがたく統合していたことが知られています。

しかし、この声の統合をより深く考えるに至らしめたものは欧州の石造建築物の音楽空間に依る所が大きく、西洋音楽史の中世・ルネッサンスは他の文化圏に対して独自の発展を遂げることになります。これはやがてオペラの発生から器楽発達の母体として作用し、今日の多岐にわたる果実を見ることになります。

わが国の本格的洋楽受容のはじまりは、西洋音楽史における19世紀後半の成熟期にあたり、これより少し遡る古典派・ロマン派初期の音楽の導入からはじめられていますが、近年に至ってその視野は急速に拡大されて現代から未来への展望、また古きはルネッサンス・バロックへの遡及的研究も顕著な進歩を見せています。

このような成果のなかで西洋音楽史を貫くものとしての合唱の歴史の重みが徐々に認識されるに至りました。すべての音楽は「声」を規範とし、その「声の集り」のように息づき、その美しさに帰るという鉄則の確認が焦点になります。

さて、音楽取調掛は東京芸術大学として受け継がれていますが、その歴史の第4四半世紀に音楽史の原点である合唱の見直しとしての、東京混声合唱団の誕生を見ましたのは学問の府が果たした一つの機能として当然の現象と云えると考えます。

この団体は昭和31年に芸大卒業生によって同志的研究団体として発足しましたが、音楽史への視野の拡大とその実践普及演奏活動をはじめ、今日のわが国の作曲界の創作意欲を刺激する最高の対象団体として既に120曲（2012.4現在198曲）に及ぶ新作の誕生をもたらしています。これらの録音物は欧米はもとよりアジア諸国にも紹介されており、わが国の創作界の今日的状況を伝える任務の一端を果たすことにも役立っています。

その視野の重要性、活動の多元性を含めてこの団体の存在はいまや社会的共有財産と判断することが、音楽文化史上急務となった感が否めません。

そこでこのたび、関係者の援助を得て、東京混声合唱団を含む職業合唱団の活動の一層の振興を図るため、より強力な財政基盤を持つ財団法人合唱音楽振興会を設立し、合唱を主体とする音楽芸術の普及振興を図り、もって我が国芸術文化の発展に寄与しようとするものがあります。